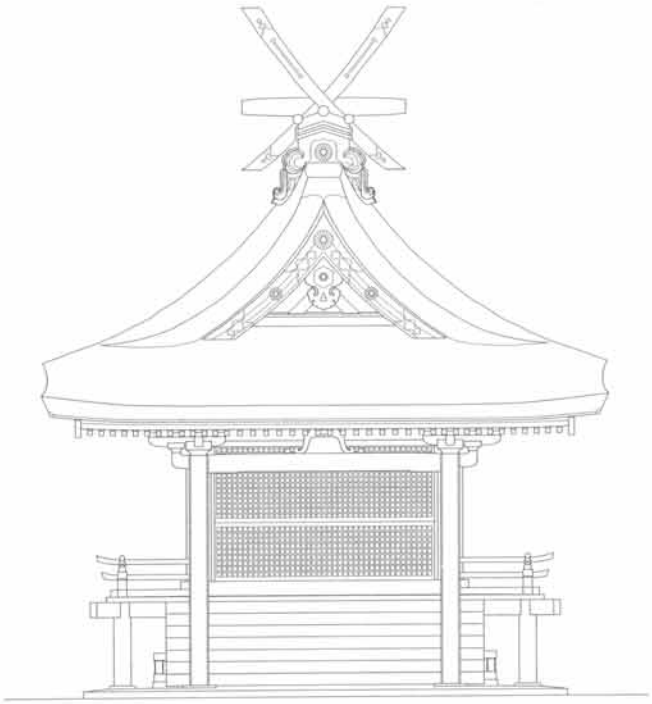
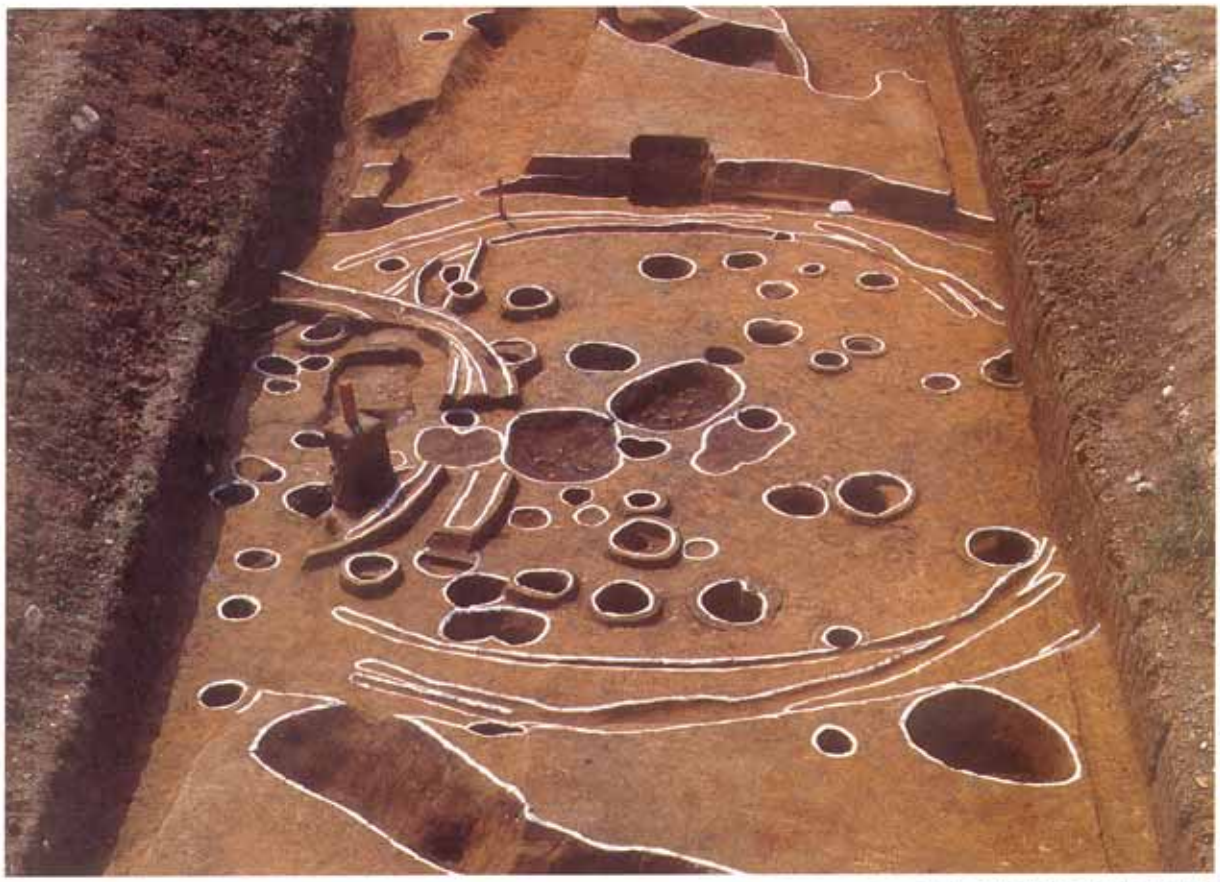
㈶和歌山県文化財センター年報

2004



財団法人　和歌山県文化財センター



1．野上中南遺跡の竪穴住居跡

2．徳蔵地区遺跡出土縄文土器

3．熊野那智大社の竣工　第一殿から第五殿

4．金剛峯寺山王院丹生明神社の竣工

目　　次

表紙カット図版：熊野那智大社第四殿正面図
巻頭カラー図版：巻頭１頁上段　野上中南遺跡の竪穴住居跡
巻頭１頁下段　徳蔵地区遺跡出土縄文土器
巻頭２頁上段　熊野那智大社の竣工　第一殿から第五殿
巻頭２頁下段　金剛峯寺山王院丹生明神社の竣工

平成16年度　（財）和歌山県文化財センター受託事業一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
平成16年度　受託事業所在地図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

埋蔵文化財／発掘調査・出土遺物整理
柏原遺跡の第３次発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
史跡高野山町石の現状変更・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
根来寺坊院跡の確認調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
平成16年度岩橋千塚古墳群の発掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
野上中南遺跡の第２次発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
徳蔵地区遺跡の発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
山口・川辺遺跡第２次出土遺物整理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
徳蔵地区遺跡第３次出土遺物整理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
高田土居城跡・大塚遺跡出土遺物整理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

文化財建造物／保存修理・史跡整備
重要文化財　福勝寺本堂ほか２棟保存修理の設計監理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
重要文化財　三船神社本殿ほか２棟保存修理の設計監理・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
重要文化財　熊野那智大社第一殿他７棟保存修理の設計監理・・・・・・・・・・・・・・・ 19
県指定文化財　荒田神社本殿保存修理の設計監理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
重要文化財　旧中筋家住宅主屋ほか５棟保存修理の設計監理・・・・・・・・・・・・・・・ 21
県指定文化財　十禅律院本堂ほか保存修理の設計監理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
県指定文化財　総持寺本堂保存修理の技術指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
重要文化財　金剛峯寺山王院本殿保存修理の設計監理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
県指定文化財　阿弥陀寺本堂保存修理の設計監理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

関連研究
「船戸箱山古墳で出土した弥生土器」と「秋月遺跡出土の石杵」・・・・・・・・・・・・・ 24
―――緊急雇用特別基金事業に伴う資料紹介―――
旧中筋家住宅の襖調査　中間報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
―――唐紙に見る室内装飾と空間概念―――

速報展
第14回速報展「紀州の歩み」を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

（財）和歌山県文化財センター平成16年度概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

平成16年度　（財）和歌山県文化財センター受託事業一覧

埋蔵文化財発掘調査・出土遺物整理事業

	事業の名称	所在地	契約期間	面積	委託機関
1	一般国道24号橋本道路 柏原遺跡第3次発掘調査	橋本市	16. 4. 7～16. 8.31	1,566㎡	国土交通省 近畿地方整備局
2	国史跡高野山町石電線類地下埋設工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査	高野町	16. 4. 8～16. 5.31	27.6㎡	高野町
3	国史跡高野山町石電線類地下埋設工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査（その2）	高野町	16.11. 5～16.12. 3	38.5㎡	高野町
4	旧県議会議事堂移転予定地における 根来寺坊院跡確認調査	岩出町	16.12.10～17. 3.31	地形測量 6,400㎡ 発掘調査 880㎡	和歌山県
5	井ノ口秋月線道路改良工事に伴う 岩橋高柳遺跡発掘調査	和歌山市	15. 9.11～16. 6.30	全体調査 2,561㎡ 16年度調査 63㎡	和歌山県
6	特別史跡岩橋千塚古墳群（大日山35号墳） 保存修理事業に伴う支援業務	和歌山市	16. 7. 1～17. 1.31	地形測量 400㎡ 発掘調査 50㎡	和歌山県
7	奥佐々阪井線半島振興道路整備工事に伴う 野上中南遺跡第2次発掘調査	海南市	16. 5.26～16.10.29	772㎡	和歌山県
8	古川高速道路関連改修調査 （徳蔵地区遺跡発掘調査）	みなべ町	16. 8. 3～17. 1.31	956㎡	和歌山県
9	和歌山貝塚線道路改良工事に伴う 山口遺跡及び川辺遺跡の第2次出土遺物等整理	和歌山市	16. 5.22～17. 3.31		和歌山県
10	紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良工事に伴う 田屋・小豆島西遺跡出土遺物等整理	和歌山市	16. 9.25～17. 3.31		和歌山県
11	西脇山口線 楠見遺跡第1次出土遺物等整理	和歌山市	17. 1. 1～17. 3.31		和歌山県
12	平成16年度近畿自動車道松原那智勝浦線建設事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査遺物整理（徳蔵地区遺跡第3次）	みなべ町	16. 4. 1～17. 3.31		日本道路公団
13	上富田南部線地方特定道路整備 遺跡調査（高田土居城跡・大塚遺跡遺物整理）	みなべ町	16. 4.21～17. 2.14		和歌山県
14	緊急雇用創出特別基金事業 「発掘調査資料整理に関する委託」業務	和歌山市	16.12.16～17. 3.31		和歌山県

文化財建造物設計監理事業等

	事業の名称	所在地	契約期間	棟数	委託機関
A	重要文化財　旧中筋家住宅 保存修理設計監理業務	和歌山市	16. 4. 1～17. 3.31	6棟	和歌山市
B	重要文化財　旧中筋家住宅主屋ほか5棟 保存修理に係わる修理修復業務	和歌山市	16. 4. 1～17. 3.31	6棟	和歌山市
C	重要文化財　福勝寺本堂ほか2棟 保存修理設計監理業務	海南市	17. 1. 1～17. 3.31	3棟	宗教法人 福勝寺
D	重要文化財　三船神社本殿ほか2棟 保存修理設計監理業務	桃山町	16. 4. 1～16.12.31	3棟	宗教法人 三船神社
E	重要文化財　金剛峯寺山王院本殿 保存修理設計監理業務	高野町	16. 5. 1～16.10.31	3棟	財団法人高野山 文化財保存会
F	重要文化財　熊野那智大社第一殿他7棟 保存修理設計監理業務	那智勝浦町	16. 4. 1～17. 3.31	8棟	宗教法人 熊野那智大社
G	県指定文化財　阿弥陀寺本堂 保存修理設計監理業務	和歌山市	16. 9. 1～17. 3.31	1棟	宗教法人 阿弥陀寺
H	県指定文化財　荒田神社本殿 保存修理設計監理業務	岩出町	16. 4. 1～17. 3.31	1棟	宗教法人 荒田神社
I	県指定文化財　十禅律院本堂ほか 保存修理設計監理業務	粉河町	16. 4. 1～17. 3.31	1棟	宗教法人 十禅院
J	県指定文化財　総持寺本堂保存修理に伴う 調査指導業務	和歌山市	16. 4. 1～17. 3.31	1棟	宗教法人 総持寺
K	史跡　和歌山城御橋廊下 復元工事監理業務	和歌山市	16. 6.17～17. 3.31	1棟	和歌山市
L	重要文化財　紀伊風土記の丘民家等 修繕設計監理業務	和歌山市	16.10.10～16.12.10	1棟	和歌山県
M	旧中筋家住宅保存修理に伴う 未指定建造物調査業務	和歌山市	17. 1.11～17. 1.20	1棟	和歌山市
N	旧県議会議事堂保存修理事業の 基本設計監理に関する技術協力業務	岩出町	16.12.20～17. 3.31	1棟	和歌山県

平成16年度　受託事業所在地図

柏原（かせばら）遺跡の第３次発掘調査

柏原遺跡の第３次調査は、一般国道24号橋本道路（京奈和自動車道）の建設工事に伴って1998年度から実施している関連遺跡発掘調査の最終年度にあたる。今回の調査対象地は図２に示す５－１区・６区・７区の３箇所で、調査面積は約1,600㎡である。

５－１区（写真１）　遺構面は２面あり、上面では近世末の土坑を、下面では弥生時代中期後半の方形周溝墓を検出している。近世の土坑は何れも円形を呈するもので、同様の遺構は第１次調査の１区及び第２次調査の６区にて多数検出されている。方形周溝墓は新たに１基検出した。墳丘部の規模は、南北７ｍ×東西5.5ｍである。これは、今回を含め柏原遺跡の調査で多数検出されている方形周溝墓の内では最も規模の小さいものである。

６区（写真２）　遺構の検出は、２層に大別できる包含層の各上面と地山面で行った。第１遺構面の遺構には土坑数基と石組遺構がある。時期は５－１区検出の土坑と同じく18世紀後半から

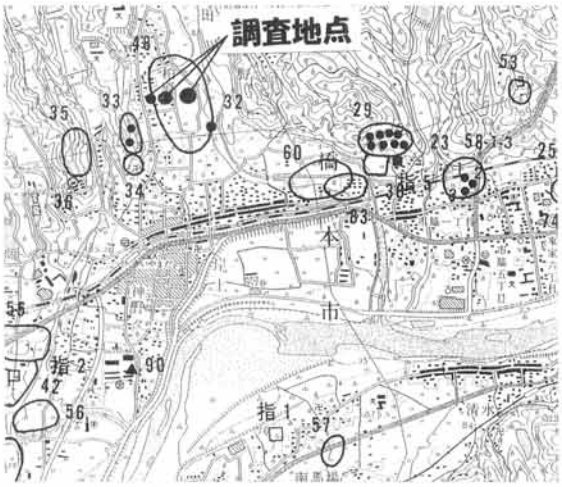


図１　調査地点

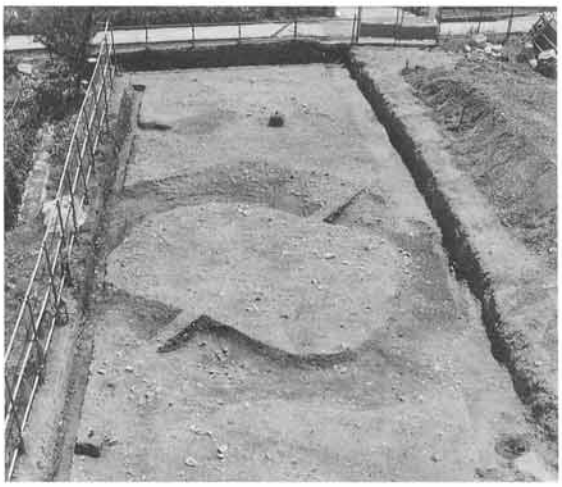


写真１　５－１区　方形周溝墓

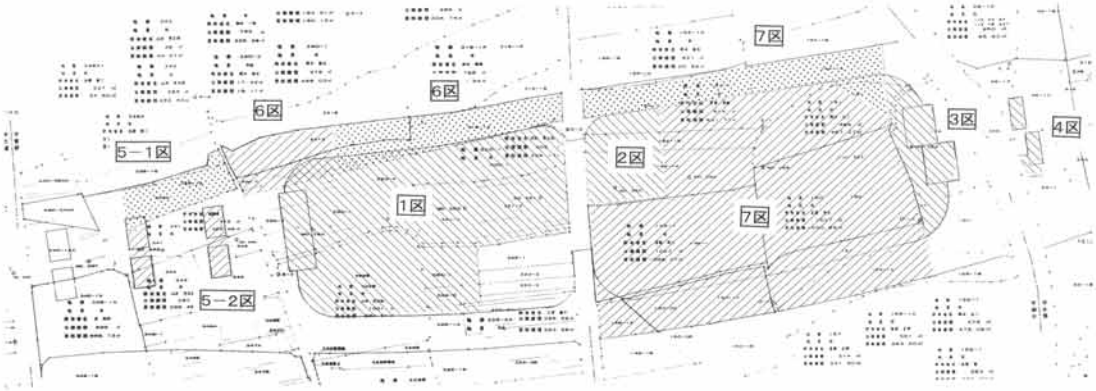


図２　調査区

19世紀前半である。第２遺構面の遺構には竪穴住居・掘立柱建物・土坑がある。竪穴住居には円形のものと方形のものとがある。前年度までの調査地から続く遺構を含めると、円形の竪穴住居が４棟、方形は１棟である。第３遺構面の遺構には柱穴があり、検出されるのは調査区東側の約１／３の範囲に限られている。

７－１区（写真３・４）　新たに検出した遺構には、竪穴住居１棟と方形周溝墓２基がある。竪穴住居は円形で、規模は直径６ｍ前後である。方形周溝墓の墳丘部の規模は、１基は東西約16.5ｍの長方形、他の１基はほぼ正方形で南北10ｍ×東西10.5ｍである。

2002年度から開始した柏原遺跡の調査では、面積約10,000㎡を発掘し、方形周溝墓18基以上、円形竪穴住居９棟、方形竪穴住居２棟、掘立柱建物６棟、墓４基、円形土坑30数基他の遺構を検出している。また、遺物は、縄紋時代から近世にかけての土器類・陶磁器・瓦の他、様々な種類の石器類が出土している。

一般国道24号橋本道路建設工事に伴い、柏原遺跡を含め４遺跡で発掘調査を行ってきたが、これまでの調査で検出された遺構及び遺物についての整理作業を、2005年度から２箇年の予定で、現在作業を実施している。　（井石　好裕）

写真２　６区　検出遺構

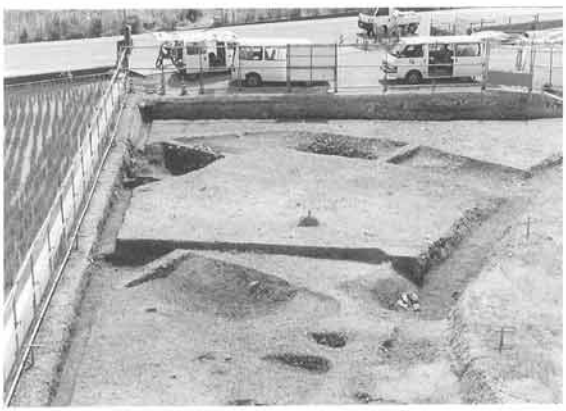


写真３　７区　方形周溝墓

写真４　７区　竪穴住居

史跡高野山町石（ちょういし）の現状変更

高野山町石は鎌倉時代に整備された地輪の長い一石五輪塔婆「町石」と、その石が一町ごとに配置された参詣道「町石道」を対象として昭和52年に指定されたもので、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を構成する重要な要素となっている。壇上伽藍の根本大塔を中心に山麓の慈尊院までの180箇所と、奥の院までの36箇所に配置されている。

今回の現状変更は道路敷地内に地下電線を埋設する工事に伴うものであるが、既に無届で工事が着工されていた場所もあり、道路を縦断するトレンチを10箇所設定して状況を確認することとなった。調査は４～５月と11月の２度に分けて実施した。

前半調査は壇上伽藍と大門の間に５箇所のトレンチを配し、調査を行なった。第４トレンチでは鎌倉時代と推定される礎石建物の柱痕を確認した。周辺からは瓦器と土師器が出土している。第２トレンチでは木枠組の溝を、第１・３・４・５トレンチでは木製の駒で繋いだ竹製導水管を確認した。いずれも、近世の遺構と考えられる。

後半調査は壇上伽藍の東にある小田原谷から、奥の院入口にある一の橋前までに５箇所のトレンチを設定して調査した。第８トレンチで近世と推定される石列を検出したほか、近世から近代にかけての焼土層を２～４層確認した。中世以前の遺構・遺物はなく、第８・９トレンチでは岩盤を、第６トレンチでは湿地状の粘土層の堆積を確認した。　（丹野　拓）

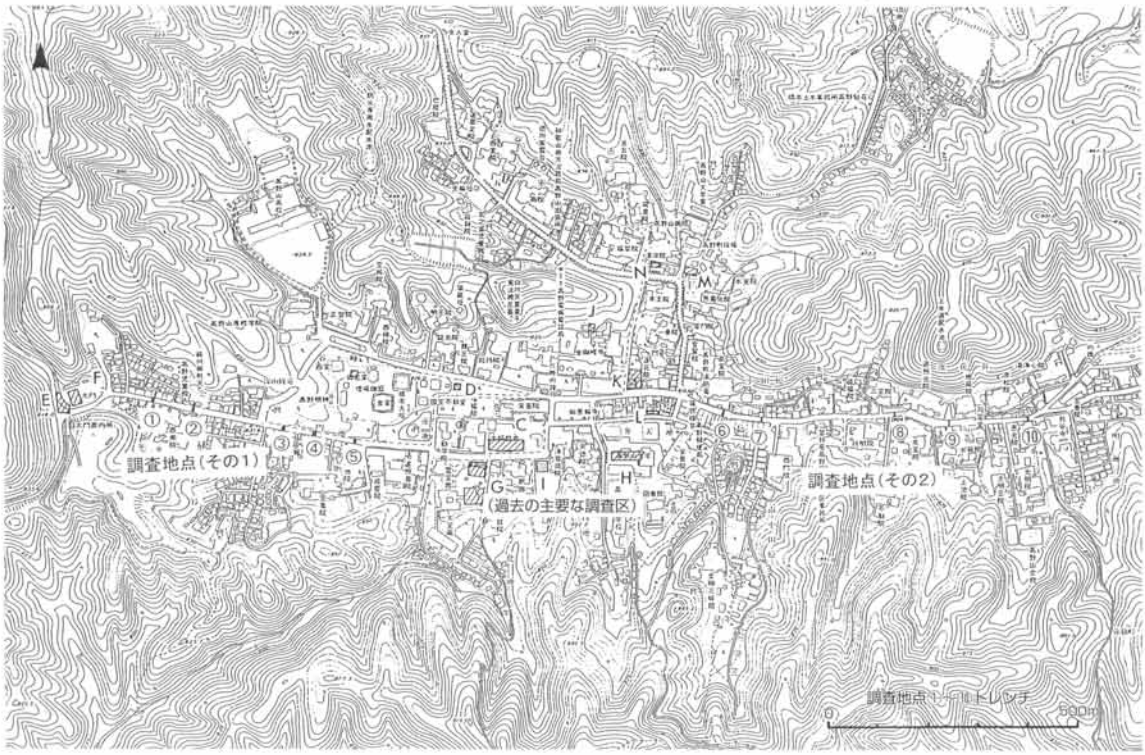


図１　調査区配置図

根来寺坊院跡の確認調査

現在、根来寺境内に建つ一乗閣は、1897年（明治30年）に和歌山市内に県議会議事堂として建てられた和風様式の木造建物である。その後、新たな庁舎が建築されたため別の場所に一度移築された後、1962年に現在の地に移された。今回の調査は、この一乗閣の老朽化が著しいため県による修復・保存が行われることとなり、その移設予定地内での埋蔵文化財の内容を確認するのが目的である。調査は、移設予定地内に幅３ｍのトレンチ17本を設定して実施した。調査に際しては、遺構面の保護を図るため、包含層の掘削は、一部を除き最上位の遺構が検出された面までとすること、また、検出された遺構についても原則として遺構内の掘削は行わず、内容を確認するための最小限度の掘削しか行わないことを基本とした。

検出した遺構の種類には、建物（礎石建物・掘立柱建物）、石組井戸、土坑、溝（暗渠・道路側溝）、石垣、道路、地鎮遺構等がある。出土遺物い段階である15世紀後半から16世紀前半にかけてのものが主体を占めている事、遺構面は、いくつかの調査区では２面以上、多いところでは３面以上存在することなどが確認できた。また、検出した遺構等から敷地の区画を復元すれば、地表面が一段低くなる調査地の南側部分では、その多くは間口20ｍ前後と、これまでの盆地部での調査例に比べ小規模なものであったと推定できる。

（井石　好裕）

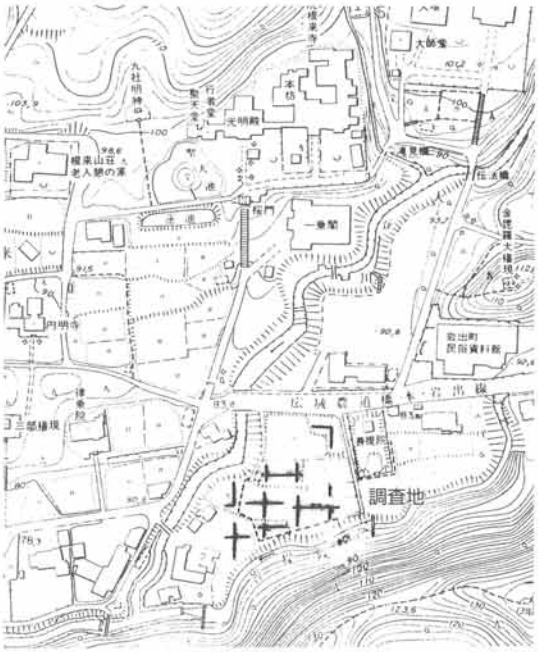


図１　調査地

写真１　道路側溝

写真２　地鎮遺構

平成16年度岩橋（いわせ）千塚古墳群の発掘調査

今回は第２次調査にあたり、前山Ａ２号墳・Ｂ41号墳で1/100平板測量と石室発掘調査を実施し、大日山35号墳で東クビレ部と東側の墳丘基壇裾部にトレンチ２本を設定し、遺構を検出した。

前山Ａ２号墳　前山Ａ２号墳は岩橋千塚古墳群中の南東部に位置する。標高約149ｍの尾根部に造られた円墳で、内部にはいわゆるＴ字形石室と呼ばれる横長の横穴式石室が築かれている。墳丘は各トレンチの土層の堆積状況から直径約10ｍの円墳と推定される。墳丘盛土は、旧地形が東北東から西南西へ傾斜するため、全体的に同様の方向で堆積している。下部は水平に近い緩やかな堆積であるが、上部になると石室を中心として、斜めに盛り上げられている。版築や作業単位を示すような土の塊は認められなかった。石室は岩橋山塊で産出する板状の結晶片岩で構築され、西南西方向に開口する。石室は岩盤を平坦に整形して築かれており、規模は玄室の幅1.88～1.92ｍ、長さ1.02～1.03ｍで、羨道の幅約0.75ｍ、長さ約1.95ｍである。石室規模が小型であることから、古墳に葬られた人物は１人だと推定される。石室は丘陵斜面の上側から岩盤をコの字状に墓坑を掘削して、床面を平坦にし、石材を水平に小口積みにしていき、周囲を土で固めて築いたものと推定される。墳丘の頂点はほぼ羨道の中間点にあたっている。玄門部から土師器壺が１点、墓道入口部から須恵器坏身が１点、南西部の墳丘中から須恵器短頸壺１点、須恵器甕と土師器土鍋の破片が出土した。これらの遺物から、古墳が築かれたのは６世紀末頃だと推定される。

前山Ｂ41号墳　前山Ｂ41号墳は岩橋千塚古墳群中の南東部に位置する。標高約140ｍの尾根の東端部に造られた円墳で、内部には玄室平面形が正方形に近い横穴式石室が築かれている。古墳は盗掘を受け、上部約1/2が破壊されていた。墳丘は断割り調査をしていないので正確な規模は明らかではないが、平板測量図の等高線の状況から直径８ｍ前後の円墳と推定される。墳丘の頂点は玄室のほぼ中央部あたりだと考えられる。墳丘の北側を切断するように境界の区画溝が掘削され、壁面の断面観察から山側には岩盤を穿って、幅約2.0ｍ・深さ0.45ｍ程の周溝が掘削されていることを確認した。石室は板状の結晶片岩で構築され、南東方向に開口する。石室は境界溝の断面土層と床面

写真１　前山Ａ２号墳石室（北から）

写真２　前山Ｂ41号墳石室（南東から）

の高さから考えると岩盤を掘削して築かれており、規模は玄室の幅1.62m、長さ1.82～1.86mで、羨道の幅0.9～1.15m、長さ約1.85mである。玄室奥壁には長さ30cm・幅20cm前後の結晶片岩の板石が敷かれ、周辺には直径5cm前後の玉石が見られることから、本来は板石を底に敷いて、その上に玉石を敷き詰めていたと推定される。排水溝は設けられていない。石室は石室の主軸方向と岩盤の板状節理面の方向および丘陵の等高線とが、ほぼ直交するように築かれている。玄室と羨道の床面の段差はほとんど無く、やや入口部が下がり気味の平坦面に石室が築かれている。墳丘上から須恵器甕の破片が1点、墓道入口部から須恵器の低脚で1段透かしの高坏脚部が出土し、この古墳が築かれたのは7世紀初頭頃だと推定される。（黒石　哲夫）

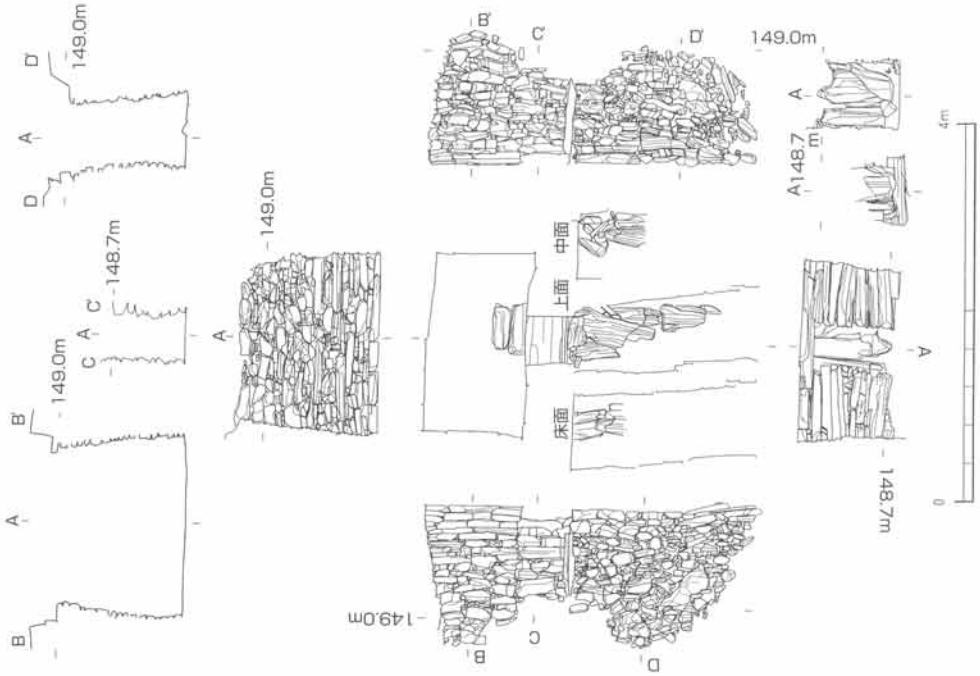


図1　前山A2号墳石室実測図（S＝1/80）

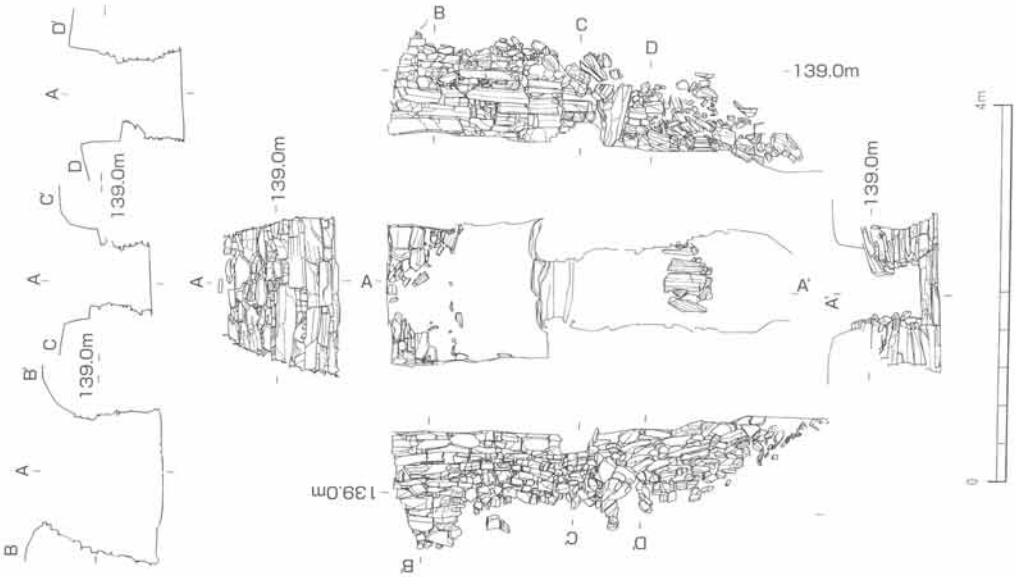


図2　前山B41号墳石室実測図（S＝1/80）

野上中南遺跡（のかみなかみなみ）の第２次発掘調査

野上中南遺跡は海南市野上中に所在する弥生時代と鎌倉時代の集落遺跡である。前年度に続き、道路建設予定地の車道部分の調査を実施した。調査区は幅2.3～6.2ｍ、長さ約175ｍの区間を４分割し、西側から順に５～８区とした。調査面積は772㎡、現地調査期間は７月20日～10月８日である。

弥生時代の遺構は調査区の西側を中心に検出した。竪穴住居跡４基、掘立柱建物跡４棟のほか、土坑・ピット等を合わせ総計236基の遺構を確認した。

５区では、松菊里型住居跡を確認した。炭のつまった楕円形の中央ピットの両脇に小ピットが配される施設をもつもので、朝鮮半島の松菊里遺跡で確認された住居跡を標識として設定された住居跡である。日本では弥生時代の前期から中期にかけて、「松菊里型」・「松菊里系」と呼称される類似した特徴をもつ住居跡が各地で確認されている。住居跡の規模は径3.1～3.5ｍと小型で壁溝はあまり判然とせず、柱穴は「窪み」に近く、柱を床面に置いた状態であったものと考えられる。中央ピットからは、サヌカイト剥片が少数出土した。遺物の大半は床面ではなく上層から出土しているが、甕の破片等から弥生時代中期前葉の遺構と推定される。掘立柱建物跡は３間×１間で4.7×3.2ｍの規模のものと、５間×１間で6.5×3.5ｍの規模のものがあり、共に桁行の柱間が狭く、梁行が１間で柱間は広いという特徴がみられる。

６区の中央では３度建て直された竪穴住居跡を検出し、径6.0～7.4ｍの４時期分の壁溝と炉を確認した。調査区の南側では１度建て直された竪穴住居跡の一部を検出した。この２箇所の住居跡は一部重なった状態で検出され（→巻頭写真）、６時期に渡る遺構と判断される。このほかにも竪穴住居跡や掘立柱建物跡の一部と推定される遺構が検出されている。

７区では、約5.5×3.5ｍのいびつな周溝状遺構を検出した。第１次調査で類似する遺構の一部を検出し方形周溝墓と考えていたが、全体の分かる本例で中央に主体部を作るのは困難な遺構と判断されたため、ひとまず周溝状遺構としておきたい。

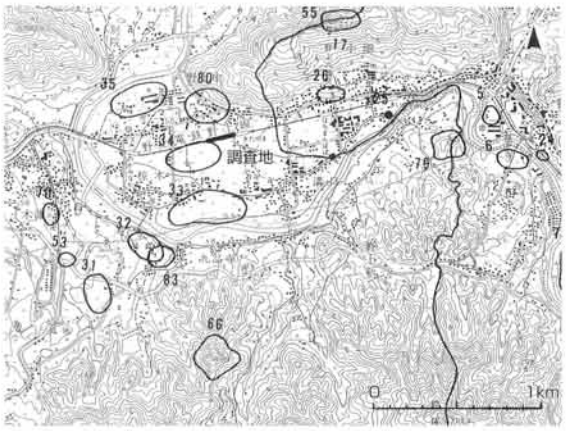


図１　調査地の位置

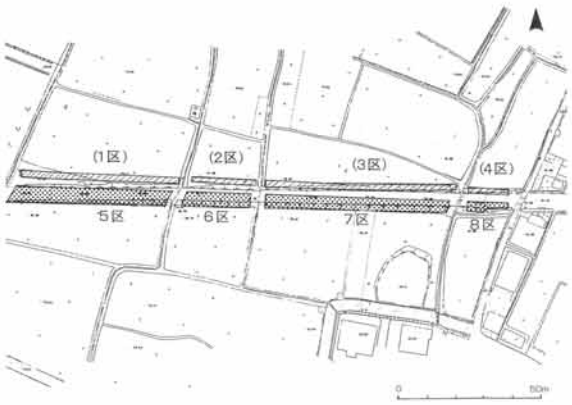


図２　調査区の設定状況

調査区の東側では、鎌倉時代の集落を確認した。

7区では、掘立柱建物跡1棟と井戸2基を確認した。掘立柱建物跡は2間×1間で、柱穴からは瓦器片が出土している。調査区外へ続く総柱建物であった可能性も残されている。東側の井戸は径3.5m、深さ2.1mで円錐形の掘方を有し、上層には河原石が散乱している。下端は緑泥片岩と河原石で1辺50cmほどの区画が作られており、周囲からは多量の水が噴出した。内部からは曲物の細片が出土しており、井筒として使われていたものと考えられる。西側の井戸は南半分が調査区にかかり調査を行ったが、下部までは掘削できなかった。瓦器椀と瓦器小皿、土師器小皿が多量に出土しており、13世紀の良好な一括資料として評価できる。出土遺物の年代から、2つの隣接した井戸は東から西へと移行したものと判断される。

8区では東側にある段丘の裾部を確認した。段丘面を削平・整地した際の排土から、瓦器・土師器小皿・東播系須恵器・陶磁器等が多数出土した。

野上中南遺跡は弥生時代と鎌倉時代の複合遺跡として取り扱われているが、実質的には「西側に広がる弥生時代の集落」と「東側に広がる鎌倉時代の集落」の2つに分かれることがより明確となった。当センターによる第1・2次調査のほか、南側隣接地を海南市文化財調査会が調査を行っており、焼け落ちた竪穴住居や小判形の竪穴住居等が検出されている。これらの調査成果を合わせて、正規の報告書『野上中南遺跡』が本年度に刊行される見通しである。　（丹野　拓）

写真1　調査地から東を望む

写真2　小学生の発掘体験

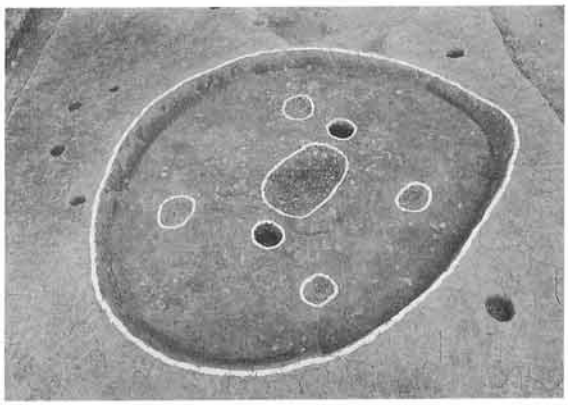


写真3　弥生時代の住居（松菊里型）

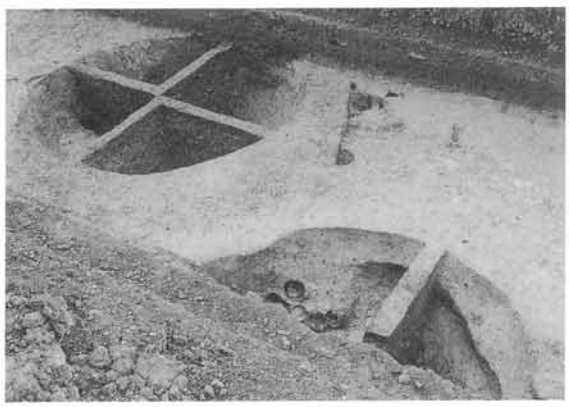


写真4　鎌倉時代の井戸

徳蔵（とくぞう）地区遺跡の発掘調査

本調査は、南部平野を流れる古川の河川改修に伴うものである。すでに平成13年度には、梅田橋を挟んで両サイド、古川右岸の延長約200ｍ（対象面積2,449㎡）について調査が実施されており、今回の調査区はこの東側、上流部に相当する地区である。縄文時代中期の大集落として知られる徳蔵地区遺跡の東北縁辺部と考えられるところから、今回の調査の主眼は、集落内容の把握とともに遺跡の立地している微高地の広がりを確認することであった。

調査の結果、遺構面としては２面を確認した。このうち上面は古墳時代（初頭）から中世にかけてのものでかなりの時期幅がある。古墳時代のものとしては竪穴住居１棟のほかいくつかの不正形な土坑・溝などが検出された。このうち竪穴住居は東西5.5ｍ南北5.4ｍを測り、竈は東辺で、中央よりかすかに南に寄って設けられている。出土した須恵器の形式からこの竪穴住居については、５世紀後半のものと考えている。また、調査区の東側では想定どおり集落の縁辺部と思われる北東方向に下がっていく落ち込み、およびこれに沿って流れる溝を確認することができた。

下面は縄文時代（中期）と考えられるもので、遺構としては、円形もしくは不正形を呈した土坑がいくつかある。出土遺物としては縄文時代中期の土器（深鉢片）が出土しており、この中には数は少ないものの東海および関東など他地域からの搬入品も認められる。古墳時代のものとしては、前述の住居址を主として土師器の高杯・壷・鉢、須恵器の甕・杯などがある。中世の遺物は少ないが、瓦器椀、土師皿など日常雑器のほか中国製の青磁椀が出土している。また、山茶碗についても数点の出土を確認している。　（村田　弘）

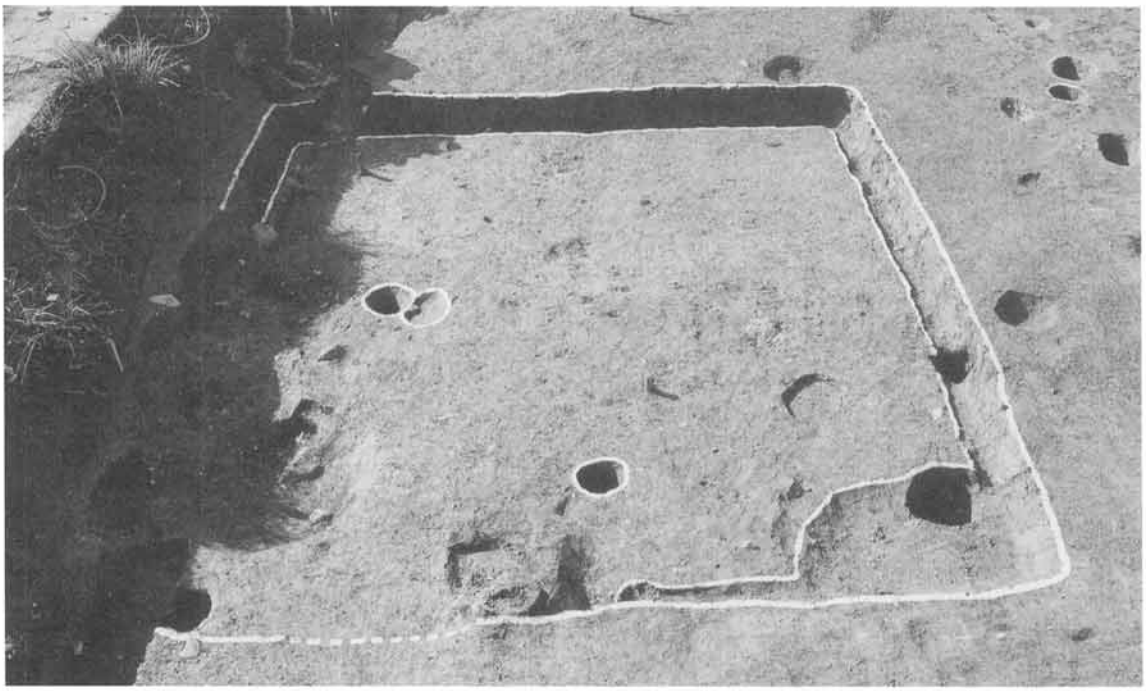


写真１　古墳時代の竪穴住居跡

山口・川辺（かわなべ）遺跡第２次出土遺物整理

本事業は、県道和歌山貝塚線の新設工事に伴うものと、この新設道路が取付く県道粉河加太線の拡幅工事に伴う発掘調査の整理事業である。山口遺跡の調査は平成６年度および平成10・11・12年度の間に５次、川辺遺跡については平成９・12・13年度の３次に亘り調査を実施した。以上の調査を平成15・16年度で整理し、16年度は報告書を刊行した。

主な検出遺構には中世（鎌倉･室町時代）の掘立柱建物・地鎮関連と考えられる遺構・溝・土坑・土壙墓、平安時代の溝・土壙墓、飛鳥時代の掘立柱建物・竪穴住居・溝・土坑・土壙墓、古墳時代の溝・掘立柱建物・竪穴住居・周溝墓・土壙墓、弥生時代前期の土坑、縄文時代の不明土坑などがある。また、これらの遺構に伴う出土遺物としては中世では瓦器椀・皿、土師器鍋・釜・皿、瓦質羽釜・火鉢・擂鉢、輸入陶磁器、備前焼擂鉢、常滑焼甕、東播系捏鉢、平安時代では土師器椀・皿、黒色土器椀・皿、飛鳥～奈良時代では須恵器（杯・高杯・瓶・壷・甕・提瓶）、土師器（杯・高杯・甕・甑）、製塩土器、平瓦、古墳時代の土師器（壷・甕・高杯・鉢・器台・小形丸底土器・ミニチュア土器）、鉄斧、弥生時代では壷・甕、石包丁、縄文時代では石鏃・サヌカイト剥片などの遺物がある。以上の遺構と遺物が整理対象となる。整理手順は、遺物の注記、接合、復元、実測・トレース、写真撮影、採拓を行ない、次に遺構のトレース、組版、原稿執筆を実施した。なお、現地調査の記録図面や記録写真の整理および土器の洗浄作業の大半は、各年次調査時の応急整理で完了していた。注記作業は調査コード（西暦の下二桁－市町村番号・遺跡番号）と遺物登録番号を記した。一例として平成13年度の第３次川辺遺跡は01－01・145 ○○となる。接合作業は遺構毎、取上げ時の小区画（４ｍメッシュ）毎、隣接する小区画で試みた。復元作業と写真撮影は、報告書の写真図版を考慮し、耐えうるものを選択して行なった。また写真撮影は、他に器面調整の細部、特異な遺物破片などを対象に行なった。土器実測図は調査次毎に実測番号を付与し、ファイルに収納した。トレース作業は報告書掲載の遺物をロットリングで、遺構図は組版した状態でスキャニングしデジタルトレースを行なった。これらの作業の過程でコンテナ台帳、遺物登録台帳、実測図台帳を作成した。　（佐伯　和也）

写真１　トレース作業

写真２　入力作業

徳蔵地区遺跡第３次出土遺物整理

本遺物整理事業は近畿自動車道松原那智勝浦線の南部インターチェンジ建設に伴う発掘調査で出土した遺物を対象に実施した。調査は平成７・８年度の試掘調査を発端に、平成９年度～平成13年度の５次に亘り実施した。

本遺跡で特筆すべきは縄文時代中期、縄文時代後期、弥生時代前期～古墳時代前期の三面の遺構面を検出した12－④区（平成12年度調査）である。この地区は微高地となっており、各面にそれぞれの時期の住居址を検出した。縄文時代中期には船元Ⅳ式の埋甕遺構、縄文時代後期には四ツ池・北白川上層式の埋甕遺構や配石遺構などがある。また、住居址や土坑からは関東や東海からの搬入品土器や石器が多量に出土した。他には13－④区（13年度調査）が挙げられる。この区は12－④区の西側に隣接する地区で同じく微高地となっており、現在でも内堀の一部が空堀として残っている高田土居城跡がある。調査地はこの城の北側の外郭部分に当たる。この区では外郭を囲む二重あるいは三重の外堀、この外堀の内側に居住区の遺構（掘立柱建物・井戸など）を検出した。なお、この下面には12－④区で検出した遺構面があることを確認しているが、和歌山県教育委員会と協議の結果、高田土居城の遺構保存を重視し、砂で養生した。また、この微高地の周囲には旧河川が巡っており、縄文時代晩期～古墳時代の堆積層から遺物が多量に出土している。

出土遺物の土器類には縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器杯、平安時代の緑釉陶器・灰釉陶器、鎌倉時代の土師質土釜・瓦器・東播系捏鉢・山茶椀、室町時代の瀬戸美濃陶器・備前焼・常滑焼・土師質土鍋・中国製磁器、江戸時代の肥前系陶磁器・溶解炉などがある。石器ではサヌカイト製の削器・石匙・石鏃・泥質片岩製の石棒、頁岩製の打製石斧、蛇紋岩製の磨製石斧、緑泥片岩製の石包丁、砂岩製の磨石・敲石・台石など、木器には弥生時代の鋤・鍬、室町時代の漆塗り椀・折敷・建築材・橋脚などがある。他には金属製品、銭貨、種実などがある。

写真１　作業風景

出土遺物整理事業は上記に列挙した遺構や遺物を対象として、平成14年度～平成16年度まで３次に亘り行なった。

遺物整理事業の一連の作業（遺物登録台帳の作成→洗浄→注記→接合→復元→実測）内容は以下のとおりである。

まず、整理作業の要となる遺物登録台帳のパソコン入力作業から行なった。これについ

ては調査年次毎に１番から登録番号を付した。土器類に関しての洗浄作業は、調査時に応急整理作業として全て洗い終わっていたため注記作業から開始した。注記作業は調査コード（西暦の下二桁－市町村番号・遺跡番号）と遺物登録番号を記した。但し、細片のため注記不可能なものについては行なわなかった。分類と接合作業は同時進行した。分類作業については、主に遺物包含層のものを対象に行ない、調査年次の地区で器種毎に分類したものを時期毎に分類し破片数を一覧表にした。この作業の過程の中で接合作業も行なった。接合作業は遺構の中ではもちろんのこと、隣接した遺構間において行なった。包含層の遺物については調査時の遺物取上げ地区（４ｍメッシュ）や、これに隣接する地区間で行なった。復元作業については基本的に石膏を用いて行ない、完全な形に復元するものと補強程度に留めておくものの二種とした。次いで、この作業の完了した個体には水性絵具で復元部分に着色した。実測作業は基本的に原寸で行なったが、木製品の建築材などの大きなものに関しては1/2あるいは1/4に縮小して行なった。また、実測作業の過程で施文や器面調整の採拓作業も行なった。

土器類の実測図台帳は調査年次毎に１番から付した。石器・木器に関しては調査年次関係なく１番から付した。但し、年次はその遺物の欄を見れば分かるようにしてある。

また、木器の保存処理、石器の分析については一部を専門機関に委託した。木器の他のものについてはセンターで糖アルコール法により保存処理を実施した。他に自然科学分析として放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実遺体分析、樹種同定などを一括して専門機関に委託した。

以上が出土遺物についての整理状況で、上記の資料を基にして、報告書刊行に向け次の作業にかかった。まずは遺構・遺物のトレース作業を行ない、遺構図版、遺物図版の版組み作業、表組み作業を行なった。そして、遺物写真図版作成のため土器、木器、石器の写真撮影作業を行なった。遺構写真図版に使用した写真は、航空写真および現場調査時のものからチョイスし版組みを行なった。原稿執筆などの作業終了後、報告書刊行のはこびとなった。

最後に徳蔵地区遺跡から出土した遺物を、報告書に使用した遺物、実測済の遺物、その他の遺物の順にコンテナに収納し、並行してコンテナ台帳を作成し、和歌山県教育委員会への移管に備えた。　（佐伯　和也）

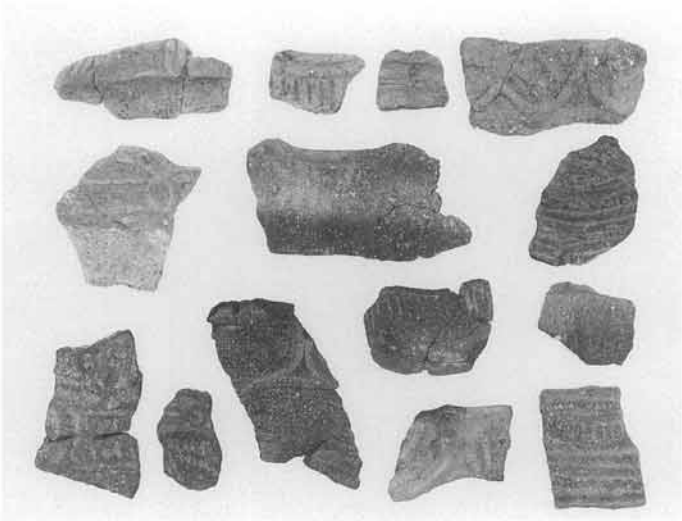


写真２　縄文土器破片

高田土居城跡・大塚遺跡出土遺物整理

本整理作業の対象は上富田南部線道路改良工事に伴い平成13年度から平成15年度にかけて発掘調査を実施した高田土居城跡・徳蔵地区遺跡および大塚遺跡で検出した遺構とこれに伴い出土した遺物等である。整理事業は２ヶ年計画で本年度はその初年度にあたる。遺物の整理対象箱数は163箱である。

初年度に当たる本年は土器の洗浄作業から着手した。また、これと平行して基本的な写真資料の整理、遺構図面の整理及び遺物登録台帳の作成を行った。

遺物の接合作業については、遺構出土の遺物を中心に進めたが、包含層出土の遺物も多く、これについても実施し、上・下層で接合関係が認められるなど成果を得ている。また、ごく一部であるが、包含層出土遺物と遺構出土遺物が接合することも確認している。

これら接合作業の終わったものについては、選別の上復元作業を実施した。とくに平成14年度調査で出土した陶質土器２個体のうち１個体については、口縁から底部まで復元ができ、今後展示資料としても供することができるものと思われる。

上記のような作業と平行しつつ、実測遺物の抽出を行い土器の実測作業を進めた。遺構出土の遺物が当初想定していた以上に多く、それに比例して実測点数も増える結果となったが、この作業については、本年度でほぼ完了したものと思っている。また、遺構図面については報告書掲載に備えて取捨選択、縮尺の検討を経た後、個々のトレース作業を実施した。さらに写真図版のうち遺構分についてはレイアウトを行い図版の作成を行った。

以上述べたように、初年度にあたる本年は基礎的諸作業を経て一部図および図版の組版まで終了したものであり、来年度は報告書を刊行する予定である。　（村田　弘）

写真１　復元された古墳時代の土器

写真２　土器実測作業風景

重要文化財　福勝寺本堂ほか２棟保存修理の設計監理

福勝寺本堂ほか２棟の保存修理事業は平成17年１月から39ヶ月の計画で開始された。今回は重要文化財に指定されている本堂、求聞持堂と附指定の鐘楼の３棟を解体修理する予定である。事業の初年度に当たる本年度は、仮設建設工事と、建物内部造作類の解体を進めた。

福勝寺は旧熊野街道が藤白峠を越えて加茂谷へと南下する峠道から東に入った山中にある。弘法大師の開基と伝えられ、本堂内部に安置される四天王像は平安末期の作であることが確認されている。加茂谷を見下ろす境内地の西には滝があり、古くから修験の行場であったことが想像される。近世には祈祷所として利用されている。斜面を造成した境内地に現在は本堂、求聞持堂、鐘楼が西から東に並んで建てられている。

本堂は寄棟造り、本瓦葺の中世の標準的な三間堂で、造営時期を示す資料は確認されていないが、堂内各所に記されている修験者などの墨書で最も時代が遡る年号は永正十二年（1514）であり、これ以前に建てられたと考えられ、頭貫木鼻の様式から15世紀後期の建立と判断できる。

求聞持堂は東面を寄棟とした本瓦葺建物で、西面は本堂に接続しており、中央間は求聞持法の祈祷所で「能満堂」の額が懸けられている。紀州藩初代藩主徳川頼宣が慶安三年（1650）に建立したことが棟札により確認でき、密教修法を目的とした施設の江戸時代初期の例として貴重である。鐘楼も様式から求聞持堂と同時期と考えられる。

本堂の各所には内外陣境の結界など現状と異なる柱間装置の痕跡のほか、背面の軒下部分を部屋状に改変していた時期があることを示す痕跡などが残っており、求聞持堂の建立など建物の用途の変化に合わせ改変が行われた様子が伺われる。また、求聞持堂は大正八年に大規模に改造が行われ、本堂との取合部が背面側に一間増築されており、旧状は宝形造の求聞持堂と本堂が渡り廊下でつながっていたらしいことが小屋組の痕跡などから解る。

これらの改変時期等を特定するためにも、中世以来建物がどのように使用されていたか、古文書など史料も併せ十分に検討していく予定である。　（多井　忠嗣）

本堂および求聞持堂

求聞持堂内部「能満堂」

重要文化財　三船神社本殿ほか２棟保存修理の設計監理

三船神社本殿ほか２棟の保存修理事業は、平成15年11月より開始し、平成16年12月にはすべての工事を完了した。本年は主に塗装彩色工事の施工を行った。

塗装彩色工事は、絵具が剥離しかけているものを膠液を浸透させて剥落止めし、既に剥落している箇所には部分的に顔料を補筆した。塗装彩色は、経年変化等により、当初の色合いが褪色・変色していることがある。三船神社の場合は、彩色では「朱（ピンクががった赤）」の褪色が著しく殆どが黒色化して墨塗りのように見えていた。また塗装では本殿向拝柱のベンガラ塗り（茶色がかった赤）が変色し、薄紫色に見えていた。社殿が西面しているため、特に紫外線による劣化が進んだようである。

丹生明神の施工（補筆中）

また現状の塗装彩色は合成樹脂系の皮膜で覆われ、状態は一見良いのだが表面に無数のひび割れが生じていたり、ビニール系の樹脂は引っ張ると伸びてケレン掛けが出来ず湯でふやかして引き剥がすなど、除去が困難であった。

合成樹脂は強固な膜を造り即効性があるが、剥離や溶解の方法が確立されておらず、数十年ごとに塗り替えを行う社寺を塗装する場合は、従来通り膠（ニカワ）を用いた伝統的な工法の方が適しているようである。今回の施工も、剥落止め・塗装彩色とも膠を用いて施工した。

（鈴木　徳子）

高野明神の彩色（補筆後）

三船神社本殿ほか２棟　竣工全景

重要文化財 熊野那智大社第一殿他７棟保存修理の設計監理

熊野那智大社の保存修理事業は平成14年7月から開始され、平成17年3月をもって完了した。平成14年度は第六殿・御県彦社、平成15年度は第三殿・第四殿・第五殿、最終年度にあたる本年度は第一殿・第二殿・鈴門及び瑞垣の施工を行い、重要文化財に指定されている全ての建物の檜皮屋根の葺き替えと塗装工事を完了した。

熊野灘に面する那智山は台風の影響を毎年のように受け、社殿の南面と西面には山の斜面を控えた高い石垣がせまり日照条件も十分とは言えない。今回の工事中も度重なる強風や長雨により一度ならず施工に影響を受けた。塗装は伝統的な技法を用いたため環境の影響を受けやすく、胡粉塗り部分を中心にカビの発生が認められた。防カビ薬剤などでは十分な効果は得られなかったが、鉛が主成分の伝統的な顔料である鉛白を用いることにより良好な結果を得ることができた。

また檜皮葺き屋根は前回の修理から最長で43年を経ていたが、修理前には補修の後が至る所に認められた。通常檜皮屋根の耐用年数が25年程度であることを考慮すると、悪条件の下環境に適した工法や材料を用いることに加え、日常的に維持管理を徹底することで建物が守り継がれてきた様が改めて確認できた。

平成16年７月、各社殿の工事の完了と時を同じくして熊野那智大社を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」は世界文化遺産に登録された。　（多井　忠嗣）

第一殿から第五殿

第六殿

御県彦社

鈴門及び瑞垣

県指定文化財　荒田神社本殿保存修理の設計監理

荒田神社本殿の保存修理事業は、平成16年度は、屋根桧皮葺き工事と、縁廻りなど木工事及び塗装（丹塗り）上塗りまでを行った。

修理前の屋根は銅板葺きであったが、これは近年の改修によるものである。また『紀伊名所図絵』では本殿中央に唐破風が描かれ、実際取り付いていた痕跡もある。今回の修理では、唐破風については当初材が殆ど残っていなかったため復元することは出来なかったが、屋根材は本来の桧皮葺きに復し、軒の厚みが６寸（18cm）の堂々たる屋根が完成した。

雑工事等では金具調査を行った。本殿の外陣及び内陣は鉄製の錠前で施錠されている。この錠前は比較的大型でしっかりしており、特に内陣のものは形状が古風で当初のものである可能性もある。惜しくも鍵を紛失しているので、今回の修理で補足製作し、錠前も錆取りや歪み直しを行い元通りに使用する予定である。また屋根箱棟にも金箔押しの飾り金具を取り付ける。

（鈴木　徳子）

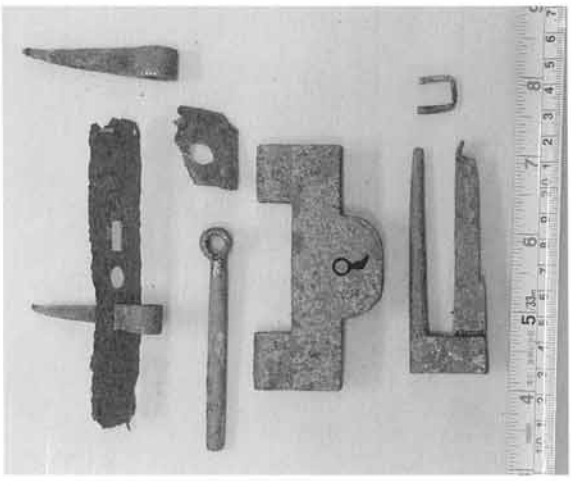
本殿塗装の状況

本殿塗装は、木部に残っていた顔料をよく観察し、分析した。

軸組や組物は丹、壁は胡粉、格子や縁の一部は墨塗りである。

階段と浜縁は中古のもので塗装されていなかったが、色調を合わせるため柿渋を塗った。

屋根桧皮葺きの施工



金具：左は内陣、右は外陣格子戸の錠前

重要文化財　旧中筋家住宅主屋ほか５棟保存修理の設計監理

旧中筋家住宅の保存修理事業は平成12年２月から98ヶ月の事業期間ではじまり、５年と１ヶ月が経過した。平成15年度までには長屋蔵・北蔵の主要な工事を終え、主屋の大広間周辺から不陸調整、土台・柱等の補修に取りかかった。

主屋は、不陸調整、土台等の補修を完了し、取合部では破損が著しい三階通し柱の二階までの取り替え、四方から刺さる胴差等の仕口の補修を行った。工事着手時点からの懸案事項であったこの柱周辺の補修が終わり、軸部の補修も着々と進み、続いて土間台所部の桁・梁・棟木・母屋の補修を行い、垂木・野地を取り付け、土居葺まで終えることができた。

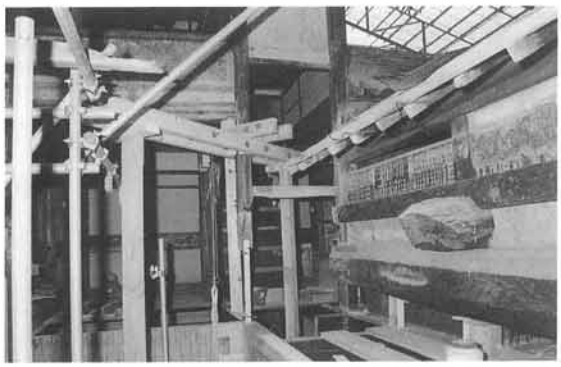
表門は年度末の三ヶ月間の工事であったが、東・南・西面の不陸調整のための揚げ屋工事を行い、建物を揚げている間に延石の据え直し、西側雨落ち石積みの積み直し等の基礎工事を行った。基礎工事のあと、土台の補修や取り替え、柱の根継ぎ等の工事を行った。

工事と並行して、襖の調査を行った。この調査は、襖の張り替えによる室内意匠の変遷等を明らかにし、本紙や下張りの仕様・破損程度から補修の方針を定めるためのものである（関連研究参照）。調査をもとに、次年度以降に襖の補修に取りかかる予定である。

また、今年度は修理修復業務の一環として、旧中筋家住宅の保存活用計画の策定を行った。旧中筋家住宅の保存と活用の両立を図るため、文化庁の指導のもと、管理団体の和歌山市と協議しながら作成したものである。これは修理完了後の保存と活用の基本方針となり、この計画に則して設備整備・周辺整備を進めていく予定である。

（寺本　就一）

主屋の不陸調整作業



取合部三階通し柱の補修

土間台所部の土居葺

表門の不陸調整と延石据え直し

県指定文化財　十禅律院本堂ほか保存修理の設計監理

十禅律院は粉河町に所在する。粉河寺の一子院であったが、寛政12年(1800）に律院として再興された。本尊阿弥陀三尊像は享和元年（1801）に10代藩主治宝によって寄進され、本堂は8代藩主重倫の生母清信院の遺言によって、吹上御殿の一部を移し建てられた。その後、文政元年（1816）に護摩堂、同8年（1825）に塗上門が建てられ、文政12年（1829）には8代藩主重倫と10代治宝が現在の本堂を再建した。天保9年（1839）頃に庫裏が建てられ、現在に至っている。

平成15年度より屋根の葺き替えを主とした維持修理が開始され、16年度は庫裏玄関部分の屋根の葺き替えを終え、続いて本堂の工事に取りかかった。本堂は屋根の形状が複雑なため、部分的に雨漏りが激しく、また軸部全体が背面側に傾斜する傾向が顕著であった。修理の手順として初めに正面の縁を解体し、建物全体の建て起こしを行った。　（鳴海　祥博）

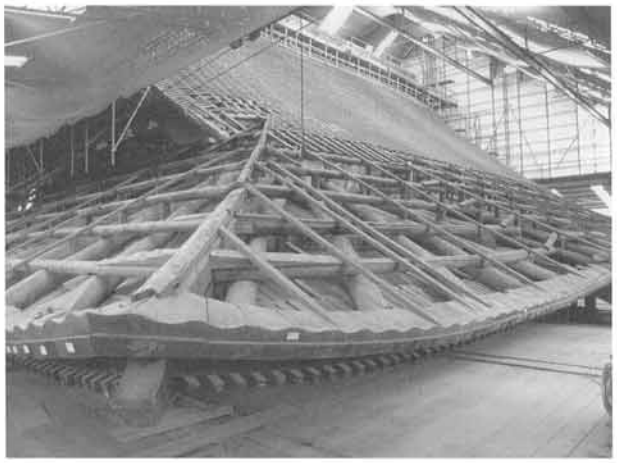
本堂建て起こしの状況

県指定文化財　総持寺本堂保存修理の技術指導

受陽山総持寺は和歌山市梶取に所在する浄土宗西山派の寺院である。創立は室町時代中期という。江戸時代には末寺88か寺を数え、「南海の本山」といわれる勢力を持っていた。記録によれば寛文7年（1667）に本堂再建の記録がある。

現在の本堂は文政3年（1820）に再建のチョウナ始め、嘉永3年（1850）に旧堂の解体、翌年地固め、安政元年（1854）立柱、同6年（1859）瓦葺き、文久2年（1862）内陣天井の張り立てと工事が進められた。明治に入ってしばらく工事は中断したらしく、明治16年（1883）から19年にかけて縁廻りや高欄、正面の桟唐戸が造られた。明治20年には梁を入れ替える大修理が行われ、翌年外陣の天井張り立て、明治22年（1889）、再建発願から実に70年を要して満作の大法会が行われた。

平成16年から屋根葺き替えを主とした修理に着手した。　（鳴海　祥博）



本堂の屋根解体状況

重要文化財 金剛峯寺山王院本殿保存修理の設計監理

金剛峯寺山王院は、高野山の地主神を祀る鎮守社で、大塔などが建つ伽藍のもっとも西側にある。社殿は東面する三棟よりなり、北より春日造の丹生明神社、同じく春日造の高野明神社が建ち、最も南に三間社流れ見世棚造の総社本殿が並ぶ。現存する三棟は、ともに大永２年（1522）に再建されたもので、内外には極彩色が施されている。

社殿は昭和55年に根本修理されているが、これ以来大きな修理は行われていない。そのため近年は桧皮屋根の腐朽が進んでおり、また塗装は退色、剥落してきていた。軒内土間は、叩き面が割れてしまっている状態であった。今回の修理では、３棟の桧皮屋根を葺き替え、縁廻りや柱等の丹塗り、胡粉塗りを塗替えた。また外部の彩色部分には剥落止めを施し、保存をはかった。加えて軒内土間は今後の耐久性を考慮して、セメントと真砂コン液を混ぜた改良土間叩きに仕様を変更して施工した。

なお今回の修理に伴って、次回の塗装修理のさいの資料となるよう、丹生明神社と高野明神社の彩色部分については、彩色見取図を作成した。　（御船　達雄）

高野明神社の屋根葺状況

県指定文化財　阿弥陀寺本堂保存修理の設計監理

阿弥陀寺は和歌山市鳴神に所在する浄土宗の寺院で、本堂は和歌山市吹上の大智寺境内にあった霊廟建築を、明治４年（1871）に阿弥陀寺本堂として移築したものである。霊廟は寛永９年（1632）紀州藩初代藩主徳川頼宣の発願により、兄秀忠（台徳院）の菩提のため建立され、桁行五間、梁間五間、正面一間向拝付、一重寄棟造本瓦葺で、内外は極彩色がなされている

阿弥陀寺へ移築のさい、縁勾欄が撤去され向拝木階が造り直されたが、おおむね霊廟時代の姿を保っている。しかし近年、縁廻りの傷みが大きくなり、また外廻りの桟唐戸や蔀戸も、緩みが出て開閉に支障を来す状態となった。このため今回の修理では縁廻りをいったん解体し、補修したうえで組み直し、さらに旧縁板を保護するとともに日常の使用に備えるため、旧来の縁板上に新たな縁板を重ね張りする工事を行った。加えて建具は折損した框等を修理し、欠失した飾金具を補足した。

なお今回の縁廻りの修理にともなう調査によって、明治の移築のさいに改変された向拝木階のもとの形式が明らかとなったため、現状変更許可を受けて、向拝木階を大智寺にあった霊廟時代の姿に復旧整備した。　（御船　達雄）

縁の修理状況

「船戸箱山古墳で出土した弥生土器」と「秋月遺跡出土の石杵」

―緊急雇用特別基金事業に伴う資料紹介―

2005年１月から３月まで、緊急雇用特別基金事業に係る発掘調査資料整理事業を実施した。ハローワークを通じて作業員を雇用し、過去の発掘調査資料を整理する事業であるが、これまでに出土遺物の管理状況を改善し台帳を整備する作業を実施しており、本年度は３年目にあたる。本年は、和歌山県内の重要遺跡のうち６箇所を取り上げて、出土遺物整理・資料整理を行った。整理対象となった出土遺物は736箱、写真は58冊、遺構原図は526枚である。また、出土遺物・資料整理と併行して資料集を作成した。

資料集の対象遺跡は、和歌山市の弘西遺跡・菖蒲谷遺跡・秋月遺跡、岩出町船戸箱山古墳、打田町粟島遺跡、九度山町慈尊院Ⅱ遺跡である。弘西遺跡は弥生時代後期の集落遺跡であり、竪穴住居２基と隣接する谷筋から多数の弥生土器が出土している。菖蒲谷遺跡は弥生時代中期の台状墓群である。供献土器のほか、古墳時代や奈良・平安時代の遺物が出土している。秋月遺跡は弥生時代から鎌倉時代までの複合遺跡であり、前方後円墳ＳＸ01は和歌山県の古墳の出現を検討する鍵として注目されている。また、平安時代の瓦や銅製鉢片のほか、井戸からは「福」と書かれた墨書土器が出土しており、当該地に比定されている貞福寺の一端が垣間見られた。岩出町船戸箱山古墳は岩橋型横穴式石室２箇所のほか３箇所の竪穴式石室が確認された古墳で、笠形埴輪や器台形埴輪といった特殊な形状の埴輪や、装飾付壺、子持ち高坏、大型台付蓋付鉢などの供献土器が出土している。打田町粟島遺跡は平安時代を中心とする掘立柱建物群の検出された遺跡で、那賀郡衙の有力な候補地である。段丘縁辺にあたる地点では、瓦窯が１基確認されている。九度山町慈尊院Ⅱ遺跡は古墳時代の集落遺跡で、竈の使用状況が分かる貴重な検出例である。

資料集では上記の遺跡について、主要な調査区平面図・遺構図のほか、出土遺物の図を約350点掲載している。ここでは、当該遺跡の主題からやや離れた存在であったため、資料集に掲載しなかった遺物から、２つを取り上げて資料紹介したいと思う。　（丹野　拓）

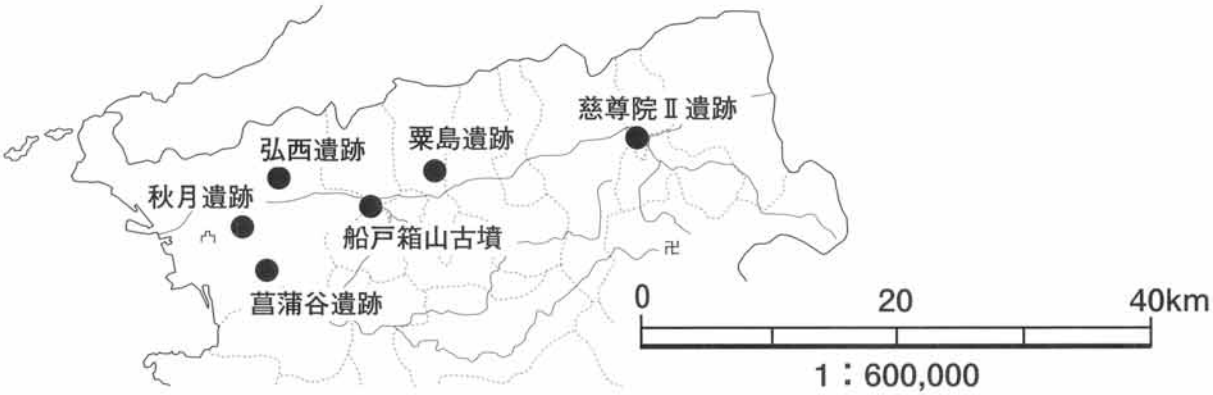


図１　整理対象遺跡・位置図

①船戸箱山古墳で出土した弥生土器

箱山は岩出町船戸にある標高74.6ｍの山で、眼下で紀ノ川と貴志川が合流する要衝の地に位置している。古墳時代には箱山古墳が築造されているが、その墳丘からコンテナ１箱分、222点の弥生土器が出土した。土器は５～８cm程度の破片しかないが、壺・甕・高坏の中から図示できるものを紹介しておくことにする。

船戸箱山古墳の調査は1973年に行われ簡単な概要が報告されている（笠井保夫「船戸箱山古墳緊急発掘調査概要」『きのくに文化財８』1974年・「37船戸箱山古墳」『和歌山県史』1983年）。それによると、湿田地の土（暗茶褐色土に相当か）から弥生土器が出土したことが報告されている。土器は５号石室・１号石室の調査中に出土したものが採取されているが、墳丘全体では相当量の土を動かし、多量の弥生土器片が混入していたものと考えられる。このような状況から、谷筋か山裾から運搬した土に弥生土器が混入していたものと推定されるが、現在、箱山周辺では弥生時代の遺跡が確認されていない。

下図の１・２は広口壺の口縁部。１は復原口径16.0cmで、口縁端部を垂下させる。紋様等は見られない。２は復原口径18.4cmで、口縁端部に面を有する。３・４は甕の口縁部。共に復原口径14.2cmで、口縁部は受口状を呈し、２条の沈線を施す。体部はタタキ、内面にはケズリを施す。５・６は高坏の脚部。坏部と脚部を接合する際に円盤技法で埋める。５は坏・脚部と同様の土を充填するが、６は粘土に多量の砂粒が含まれ高坏本体との違いが一目瞭然な土をかなりの厚さで充填している。７～９は底部の破片。７・８は壺、９は甕の底部である可能性が高い。

これらの土器はすべて破片であり詳細には時期を限定し難いが、弥生時代中期後半から後期前半の範疇に収まるもので、紀ノ川筋に高地性集落が展開した時期の資料にあたる。今回の整理事業で報告した和歌山市弘西遺跡や、その背後にある高地性集落の橘谷遺跡はほぼ同年代の資料であり、船戸箱山の周辺にもこれらに類似する集落があったものと推定される。　（丹野　拓）

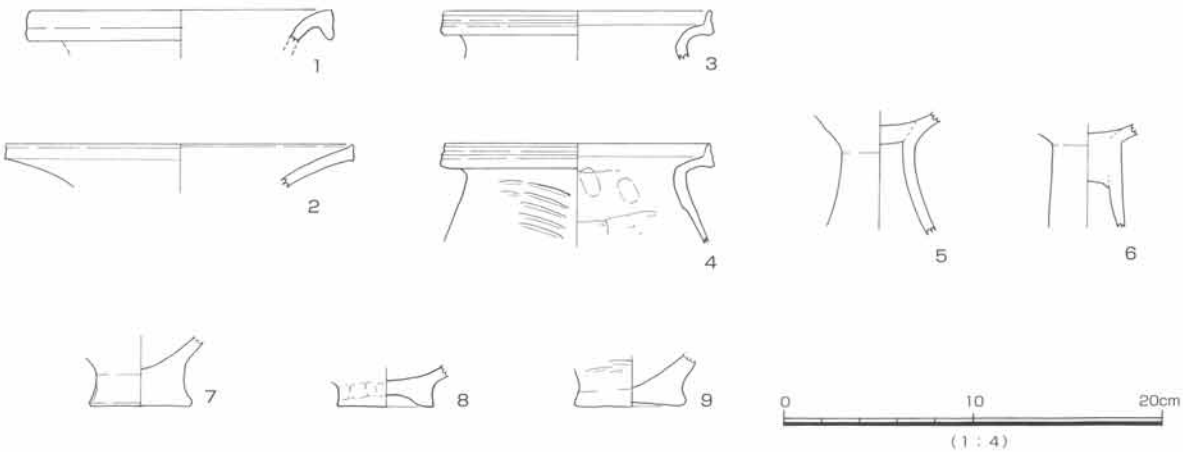


図２　船戸箱山古墳で出土した弥生土器

②秋月遺跡出土の石杵

1985年度に実施された県立向陽高等学校特別教室建設に伴う秋月遺跡の発掘調査（県Ⅱ１地点）で出土した遺物の中に、赤色顔料（水銀朱か）が付着した石杵を確認したので報告する。

赤色顔料が付着する石杵（10）は、完形で、やや凸面状になる磨り面をもつ。磨り面は非常に平滑で、部分的に擦痕が観察できる。赤色顔料は磨り面の全面に付着するのではなく、石材の小さな窪みなどに残されている。石材は和泉砂岩で、磨り面以外には加工や整形した痕跡はなく、持ちやすい自然石をそのまま利用したものと思われる。古代の溝（SD02）から出土しているが、庄内式期などの古い時期の遺物も多く混入する遺構で、遺物の時期を決定することは難しい。

この他に礫石器が数点出土しているが、赤色顔料の付着したものはない。その中に形態的に棒状石杵の可能性がある磨り石（11）が１点確認できた。この磨り石は、上部には敲打痕跡があり、体部にも一部敲打痕跡が残る。下部には若干凸面状の磨り面がある。磨り面の形状は10に似ており、擦痕が認められる。和泉砂岩製で、磨り面以外に加工や整形の痕跡はない。前方後円墳（SX01）周溝下層から出土しており、同じ層から庄内式期の土器が多く出土している。

なお赤色顔料が付着した石杵は、県内では溝の口遺跡（縄文時代晩期）、太田・黒田遺跡第43次（弥生時代中期後葉）、府中Ⅳ遺跡（弥生時代後期後葉）で出土例が確認されている（高橋方紀2000「和歌山市府中Ⅳ遺跡出土の石杵について」『紀伊考古学研究』３）。　　（仲原　知之）

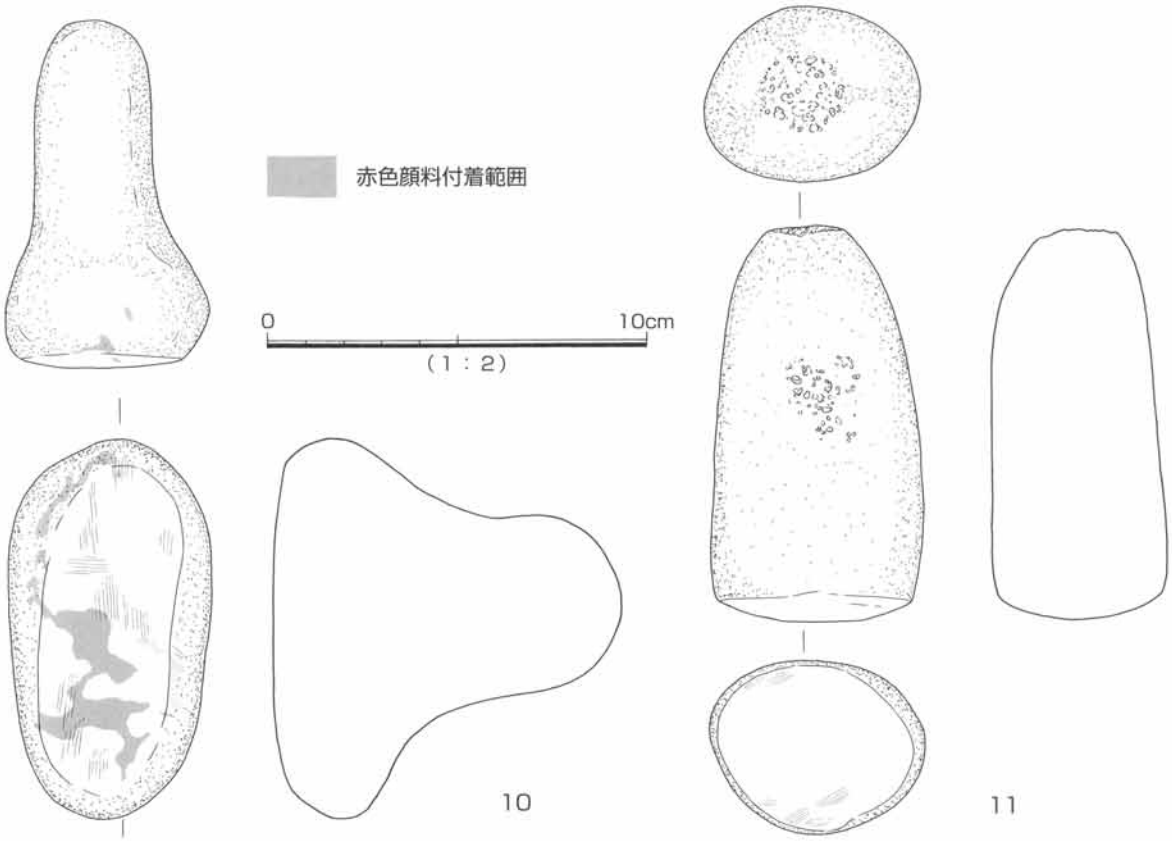


図３　秋月遺跡で出土した石器（石杵）

旧中筋家住宅の襖調査　中間報告

―唐紙に見る室内装飾と空間概念―

建具で印象付ける空間

日本家屋は“建具を取り払うとひと続きの部屋になる”とよく言われるが、中筋家はまさにその通りである。内法間には殆ど壁はなく、必要に応じ板戸・明障子・襖の三種の建具で空間を仕切っている。板戸は戸締まりを要する箇所に、明障子は外光を取り入れる為に、襖は部屋境に間仕切りとして建て込まれている。

襖には文様を刷った唐紙が張られ、室内装飾も兼ねている。半間の小壁の付いた８畳の部屋を想定すると、床・天井も含めた総展開のうち唐紙（襖）の占める割合は４割にもなり、室内の印象を決める重要な要素である。これまでの調査で、畳・壁土なども部屋の用途や格式に応じて使い分けのあることが分かっている。唐紙文様もそのように解釈するとわかりやすい。

唐紙の文様と変遷

襖は張り替えや転用があり変遷が複雑で、主屋が建てられた嘉永５（1852）年当初まで遡って復元することは難しいが、中筋家で最も格式のある大広間と隣接する（つまり襖が表裏の関係になる）部屋（図１の1～4）は張り替えの形跡が無く、当初の可能性の高いところである。また、中筋家の完成期とされる明治中期頃、明治25（1892）年に唐紙が大幅に張り替えられており（図２）、この時期を一応の目標として復元してみた（次頁、図５参照）。

大広間の襖紙は白色のＡ「間似合紙（まにあい）」で、床間と違棚の壁まで全てこの紙で張っている。間似合紙は鳥子紙より土を多く混ぜて漉き、光を遮断し劣化を防ぎ、また虫食いにも強いという。

大広間の南の衣装部屋には、白地に青い色合いが特徴的なＢ「唐花立涌（からはなたてわく）」の唐紙が張られている（図３）。この文様は十禅律院（図４　県指定文化財、粉河町）を始め湊御殿の遺構に多く張

図１　旧中筋家主屋の部屋名

1：大広間　2：小書院　3：衣装部屋
4：北畳廊下　5：東三畳　6：南畳廊下
7：仏間　8：木地の間　9：中の間
10：表座敷　11：大玄関　12：小玄関
13：二畳　14：居間　15：納戸

明治二十五年九月二十八日
和歌山市匠町　表具師　宇治平三郎

図２　仏間押入
裏面の墨書

前年の明治24年に当主が村会議員に当選、当年には先代の25周忌があったので、その関連で張り替えか。

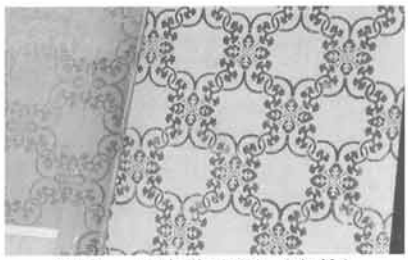


図３　Ｂ唐花立涌（中筋）

図４　十禅律院
天井までＢの唐紙

られており、紀州藩との関係が考えられる。このBは現状では衣装部屋と大玄関、ほかに畳廊下物入れや三階出入口などに張られている。衣装部屋、畳廊下物入れ、三階出入口のものは張り替えが無く当初としてもよい。また張り替えのあった襖にもかなりの枚数にBの断片が残っていた。

次に桐紋（図６）についてだが、各紋の大きさはＣ大桐9㎝、Ｄ中桐7.5㎝、Ｅ小桐（豆桐）4.5㎝、Ｆりんず桐3㎝で、紋が大きいほど格式が高い。Ｃ・Ｅ・Ｇは紙に雲母（キラ）で型押し、光線の加減で文様が見え隠れする。Ｄ・Ｅは厚めの型紙を用いた置上げという方法で、陰が出るので立体感がある。特にＦは地にもりんず模様をキラ押しし、紋は小さいが実は一番贅沢である。この桐紋唐紙には１枚の高さが1.0尺のものと1.17尺のものがある。「唐長（からちょう）」（後述）によれば1.17尺のものは江戸末期に出たもので特に明治になってから流通したといい、図２の明治25年の唐紙も1.17尺なので符合する。1.17尺の唐紙は西三畳から仏間までの大桐と、木地の間のりんず桐に用いられ、上下框の止め釘が丸釘のみの箇所もあり、これらは明治期の張り替えと特定できる。

これらのことから推察すると、明治期に大幅な意匠の変更があったと考えられ、少なくとも西三畳から仏間にかけては青い唐花立涌から白色大桐に変更された可能性は高い。明治という新しい時代になり、藩の賓客を迎えるはずの大広間が用途を失ったことが、その原因のひとつであると考えられる。最後に、調査中にいろいろな唐紙を発見したので掲載しておく（図７）。

文様名などについて

唐紙の文様名は創業400年の京からかみ「唐長（からちょう）」の示唆による。桐紋など殆どのものは「唐長」に類似の版木があったが、Ｂは該当するものがなく京好みではなかったようである。ただし慶応元（1865）年から明治16（1883）年まで駐日英国公使であったパークスの収蔵品（キュー・ガーデン所蔵）に同一のものがあり、特に長崎で収集された一群は中筋で見つかったものと文様や色合いがよく似ている。やはり駐日公使で『大君の都』の著者として名高いオルコック収集の江戸唐紙（Ｖ＆Ａ美術館収蔵）と比較すると、東西の好みの差がよくわかる。　（鈴木　徳子）

図５　唐紙の分類（明治25年当時）

Ａ：間似合紙　Ｂ：唐花立涌
Ｃ：大桐（キラ押）　Ｄ：中桐（置上）
Ｅ：小桐（キラ押）　Ｆりんず桐（りんず＝キラ押、桐＝置上）　Ｇ：布袋桐（キラ押）

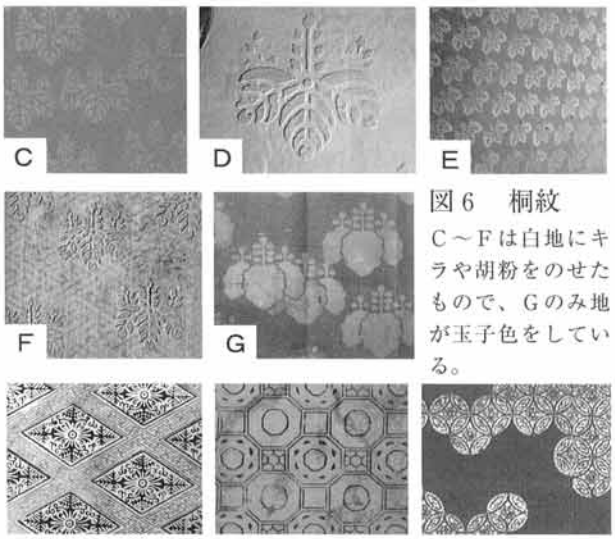


図６　桐紋

Ｃ～Ｆは白地にキラや胡粉をのせたもので、Ｇのみ地が玉子色をしている。

図７　唐紙のいろいろ

左２種は２階の転用襖の本紙下に、右は小玄関-大玄関境の本紙下に張ってあったもの。

第14回速報展「紀州の歩み」を終えて

昨年度に引き続き、県立紀伊風土記の丘の資料館を会場として、当センターの速報展を開催した。開催期間は7月1日から9月23日までで、2,434人が来場した。展示は3部構成の形をとり、埋蔵文化財関連の出土遺物や文化財建造物関連の部材などを展示した。

Ⅰ部では、平成15年度に調査した7ヶ所の遺跡の出土遺物を展示した。橋本市柏原遺跡では、弥生時代の方形周溝墓群から出土した弥生土器や飛鳥～奈良時代の竪穴式石槨から出土した耳環のほか、縄紋時代の土偶や石棒等を公開した。平池古墳群と大日山35号墳では、円筒埴輪や形象埴輪のほか、須恵器や銀製空玉などの装身具を展示した。和歌山市内の岩橋高柳遺跡では飛鳥時代と鎌倉時代の土器群や近世の窯道具を、和歌山城跡では安藤家の家紋の入った適水瓦等を、野上中南遺跡・蛭田坪遺跡では弥生土器等を紹介した。

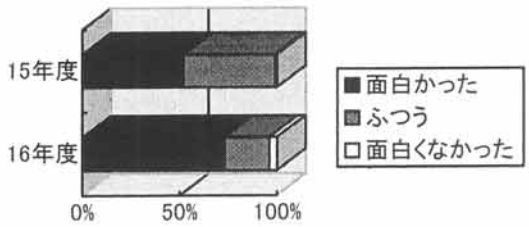
Ⅱ部では、世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」にスポットを当てた展示を行った。熊野三山と高野山の建造物を中心に参詣道や那智の滝などの写真パネルを壁面に展開し、その下に各調査で出土した遺物を並べて過去と現在を対比させた。那智大社の入口にあたる川関遺跡からは、中国や朝鮮半島のほか、タイやベトナム産の陶磁器も展示され交流の広さを感じさせた。

Ⅲ部では、修理が行われている岩出町荒田神社本殿の建築部材が立体的に展示された。彫刻類の出来栄えはすばらしく、地元根来坂本村出身で江戸幕府の「作事方大棟梁」へと大出世を遂げた平之内正信の関与等が推定されている。

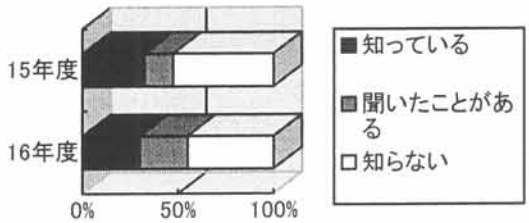
展示期間中に2回の関連講座を開催し、那智山と高野山を題材に埋蔵文化財と建造物の両面から研究成果が披露された。

アンケートの集計結果では、平成15年度よりやや好評で、文化財センターの知名度も若干上昇している。来館者数も1割ほど増加しており、展示会場が昨年と同一場所であったため、リピーターが若干増えたものと考えられる。　（丹野　拓）

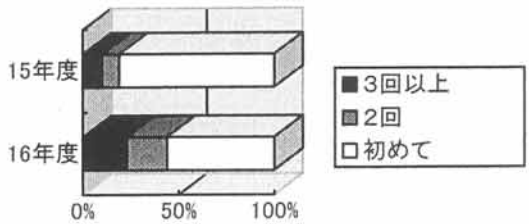
展示への感想



センターの知名度



速報展への来訪回数



(財) 和歌山県文化財センター平成16年度概要

Ⅰ　受託事業

埋蔵文化財発掘調査受託事業　8件　　文化財建造物保存修理設計監理等事業　14件

埋蔵文化財遺物整理等受託事業　6件

Ⅱ　会議等

理事会・評議員会等	評議員会	平成16年４月28日（水）	文化財センター会議室
	理事会	平成16年４月28日（水）	文化財センター会議室
	役員会・評議員会	平成16年５月27日（木）	ホテルアバローム紀の国
	理事会・評議員会	平成17年３月24日（木）	ホテルアバローム紀の国

全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係			文化財建造物関係		
（1）総　会	16.06.10−11	福島県白河郡西郷村 ホテルサンルート	（1）建造物保存修理事業監督者会議（鳴海）	16.04.19	東京都 文部科学省
（2）研修会 （黒石・藤井発表）	16.10.14−15	和歌山市 和歌山東急イン	（2）建造物保存事業幹部技術者研修会（鳴海）	16.04.20	東京都 学士会分館
（3）近畿ブロック会議 （松田・村田）	17.02.24	京都市 京都文化博物館	（3）建造物修理主任技術者講習会（鈴木・御船）	16.08.23−31	東京都 建造物保存技術協会
（4）近畿ブロック事務担当者会議（西本）	17.02.25	大阪市 大阪市歴史博物館	（4）建造物保存事業主任技術者等連絡協議会	16.10.12	東京都
（5）第29回近畿ブロック主担者会議（渋谷）	16.07.09	大阪市 以和貴荘	（5）建造物保存事業主任技術者研修会（鳴海・寺本・多井）	16.10.13−14	東京都
第30回近畿ブロック主担者会議（佐伯）	17.02.10	滋賀県 琵琶湖文化館	（6）建造物保存事業中堅技術者研修会（御船）	16.06.14−16	埼玉県妻沼市
指定管理者制度検討会（村田）	16.08.27	大阪市 大阪市文化財協会	建造物保存事業中堅技術者研修会（鈴木）	16.07.26−28	福井市小浜市
（6）第１回ＯＡ委員会 （藤井）	16.06.18	京都市 京都市埋文研究所			
第２回ＯＡ委員会 （藤井）	16.11.05	京都市 京都市埋文研究所			
第３回ＯＡ委員会 （藤井）	17.03.04	大阪市 大阪市歴史博物館			
（7）近畿ブロック研修会 （井石）	16.10.08	大阪府八尾市 八尾市文化会館			

Ⅲ　普及事業

速報展	「紀州の歩み」 文化財センター 第14回速報展	16.07.01 〜09.23	第7回巡回展 和歌山県立紀伊風土記の丘　共催	紀伊風土記の丘
	第１回　関連講座	16.07.24	黒石哲夫「川関遺跡・藤倉城跡の発掘調査について」 多井忠嗣「熊野那智大社の建物と保存修理」	紀伊風土記の丘
	第２回　関連講座	16.08.21	村田　弘「高野山にみる中世陶磁器の流通」 鳴海祥博「国宝金剛峯寺不動堂の謎」	

Ⅳ　現地見学・講師派遣など

埋蔵文化財関係		文化財建造物関係	
16.04.06	岩橋高柳遺跡地元自治会代表見学 （丹野　拓）	16.09.08	和歌山県文化財研究会文化財講座 「文化財建造物の見方・ 楽しみ方－社寺編－」（鈴木徳子）
16.05.12	きしがわ文化財研究会（貴志川町生涯学習センター） 「平池古墳群の発掘調査について」 （藤井幸司）	16.10.20	和歌山県文化財研究会文化財講座 「文化財建造物の見方・ 楽しみ方－民家編－」（御船達雄）
16.06.26	第7回近畿弥生の会　大阪場所（エルおおさか） 「橋本市柏原遺跡の調査から」（井石好裕）	17.01.20	旧中筋家住宅修理現場見学 （和歌山県立博物館友の会）
16.08.11	吉備町子ども古代探検隊 「野上中南遺跡　THE発掘体験」（丹野　拓）	17.01.22	旧中筋家住宅修理現場見学 （大宇陀町教育委員会）
17.02.19	吉備町歴史講座　いにしえの吉備（吉備ドーム） 「明恵上人遺跡」（村田　弘）	17.01.22	根来寺一乗閣見学会 （建築史談話会）
17.03.09	粉河ロータリークラブ例会（粉河ふるさとセンター） 「桧田荘堤防にみる紀の川の治水」 （村田　弘）	17.01.31	旧中筋家住宅修理現場見学 （長岡造形大学―平山育男氏ほか）
		17.02.16	旧中筋家住宅修理現場見学 （和歌山県立東高等学校―総合学習）
		17.03.14	旧中筋家住宅修理現場において木構造の調査 （和歌山県都市政策課）

Ⅴ　（財）和歌山県文化財センター組織表

理事長　1名	理　事　6名	事務局長 ―― 事務局次長 ――	管　理　課（3名）
副理事長　2名	評議員　14名	（専務理事兼務）	埋蔵文化財課（8名）
専務理事　1名	監　事　2名		文化財建造物課（5名）

Ⅵ　職員名簿

事務局長		岩　橋　　驍
事務局次長		松　田　正　昭
管理課	課　長	西　本　悦　子
	副主査	松　尾　克　人
	主　事	出　口　由香子

埋蔵文化財課	課　長	渋　谷　高　秀
	主　任	井　石　好　裕
	主　任	村　田　　弘
	主　任	佐　伯　和　也
	副主査	黒　石　哲　夫
	技　師	藤　井　幸　司
	技　師	丹　野　　拓
	主　任	土　井　孝　之 （大阪府文化財センターへ派遣）
文化財建造物課	課　長	鳴　海　祥　博
	副主査	寺　本　就　一
	副主査	多　井　忠　嗣
	副主査	鈴　木　徳　子
	副主査	御　船　達　雄

㈶和歌山県文化財センター年報
２００４
２００５年５月
編集
発行　財団法人　和歌山県文化財センター
（担当　仲原知之／御船達雄）
印刷　西岡総合印刷株式会社